

教育心理学年報 第1集

349 心身障害児の身体的・心理的特徴について：山下功（九州大学）

昭和33年10月より九大小児科外来で発達検査，知能検査を心身障害児に対して行い，一応の結果を得たので報告する。尚子供の発達を各能力別に測定出来，簡単に記録出来るように考案した乳幼児分析的発達査法についても併せて報告する。

351 心的飽和についての実験的研究：塚本三朗（早稲田大学）

CA13・5才，IQ 60，MA 8才の精薄群Aを選び，A群とMAが等しい，年長精薄群B，正常群C，及びCAが等しい正常群Dを作り，この4群に心的飽和の実験を施行し，(1)共飽和率，(2)飽和時間，(3)作業量，(4)作業速度，(5)描画の変容，(6)課題の難易評定と飽和時間の関係の6項目を検討した。(1)では正常群が精薄群より高いが，B群がA群より高かった。(2)では正常群が長く，A群を除く3群が課題が進むに従い短くなる傾向を示した。(3)(4)ではMAの同じ3群と，D群の間に差がみられ，(5)ではD群以外は，様々な変容を示した。(6)では課題の被験者による難易評定と，飽和時間との間には，相関があまり認められないということがわかった。

352 ろう生徒の読唇についての一分析：佐々木一洋（東北大学）

読唇研究は読唇に関連する諸要因，たとえば類似唇齒型語の弁別力・筆答式言語力・スパンテスト・置換テスト・同じ材料によるちがう話者で読唇成績などについて研究がなされてきてはいるが，読唇関連要因論に関しては尚複雑な問題があり読唇の基本的特性があきらかになったわけではない。本研究はこれらの諸結果をふまえて，聾生徒特有の言語型式と読唇との関係を読唇実験によって見たものである。日常生活に於いて使用している言語型式は読唇成績に影響を与えているようである。

353 映画による読話テストの試み（Ⅰ）：①中野善達・尾島碩心（東京教育大学）・②松尾安雄（川崎ろう学校）

Face-to-face 事態を使つての読話テストは結果に客観性が乏しく，かつ資料の相互比較も困難である。そこで我々は映画による読話テストを試みた。ここでは，その結果及び応答の傾向を考察し，更に同一被験者に施行した別のフィルムテストの結果（第28回応心発表）とを比較検討する。被験者は，神奈川県内のA・B・C・D 4つのろう学校児童生徒（小学4～中学3）242名。検査材料には2～7の文節を有する15の文章を用い，各文章は画面に現われる人物によって2回繰り返される。テストは1回に8ほどずつ昭和36年2月から7月までの期間になされた。

354 同上（Ⅱ）

本テスト（M-filmと略）での結果及び，話し手・検査材料の異なる別のテスト（28回応心発表T-filmと略）の結果は表の如くなる。

	M- film		T- film	
	M	S. D	M	S. D
A	28.4	12.9	52.4	21.1
B	21.3	11.5		
C	23.8	13.5	48.6	19.4
D	27.8	15.8	55.4	25.4
M	24.4		51.0	

MとTとの順位相関はAで $r_s = 0.83$ Cで $r_s = 0.73$ Dで $r_s = 0.91$ と極めて高い。成績は個人差が著しく大きく，また文章による読話明瞭度にも有意な差がある。誤りの分析結果は，かなり顕著な傾向を認め得た。